

出家発心章（一帖第二通）

当流親鸞聖人の一義は、あながちに出家発心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず、ただ一念帰命の他力の信心を決定せしむるときは、さらに男女老少をえらばざるものなり、されば、この信をえたる位を、経には、即得往生住不退転と説き、釈には、一念發起入正定之聚ともいえり、これすなわち、不来迎の談、平生業成の義なり、和讃にいわく、弥陀の報土をねがうひと、外儀のすがたはことなりと、本願名号信受して、寤寐にわするることなかれといえり、外儀のすがたというは、在家出家男子女人をえらばざるこころなり、つぎに、本願名号信受して、寤寐にわするることなかれというは、

かたちはいかようなりというとも・また罪は・十悪五逆・謗法闡提
の輩なれども、回心懺悔して・ふかくかかるあさましき機をすく
いします・弥陀如来の本願なりと信知して、ふたごころなく。
如来をたのむごころの、ねてもさめても憶念の心つねにして、わす
れざるを本願たのむ決定心をえたる・信心の行人とはいうなり、
さてこのうえには・たとい行住坐臥に称名すとも、弥陀如来の
御恩を報じもうす念仏なりとおもうべきなり、これを・
眞実信心をえたる・決定往生の行者とは申すなり、

あなかしこ　あなかしこ

(不読)

あつき目にながるるあせはなみだかな

かきおくふでのあとぞおかしき

文明三年七月十八日

出家発心章の大意

親鸞聖人のみ教えでは、ことさらに家を捨て欲を捨ててさとりを求める心をおこすことが大切なのではありません。ただ一心に阿弥陀如来に帰命する他力の信心が定まるときには、老若男女の区別はないのです。

そして信心を得ている位を、經典には、「即得往生住不退転」と説かれており、また論釈には、「一念發起入正定之聚」と示されています。このことは、「臨終の来迎を期待するのではなく、

平生において信心が定まるときに往生が定まった身になる」ということです。

親鸞聖人のご和讃には、阿弥陀如来の浄土に往生しよう
と願う人は、在家か出家か、男か女かなどの違いに関わらず、また
どのような重い罪をもったものであっても、このようなあさましいもの
をお救いくださる阿弥陀如来のご本願であると知らせていただき、
二心なく如来に帰命して、寝てもさめても本願名号を心に
たもちなさいと示されています。そのような人を信心の人というの
です。

信心が定まった後には、たとえどのようなときに念仏を称えて
も、仏恩報謝の念仏と思うべきです。そのような人を、**眞実信心**
を得て往生の定まった念仏者というのです。